

タイトル	言語学における合意と争点(退職記念)
著者	栗原, 豪彦
引用	北海学園大学人文論集, 45: 27-66
発行日	2010-03-31

言語学における合意と争点

栗 原 豪 彦

1. はじめに

近年の言語研究の状況と特徴を大雑把に総括しようとする場合、否応なしに直面するのは、複雑多岐にわたる現象である言語や心 (mind) を研究対象とする関連分野の多様性を反映するような理論とアプローチの多様化であり、さらにそれに伴う記述や説明の学際化である。さらに過去 30 年ほどは言語学の経験的基盤が膨大になったことで、さまざまな分野と多種多様な言語をめぐる研究の進展や動向を追跡するのがますます難しくなっているとともに関々の争点をめぐる議論と理論全体への帰結といった関係もとらえがなくなっているという事情がある。さらに、経験論と合理論の対立がさまざまな形で (変容しながら) 言語研究に持ち込まれたこともあり、そもそもの研究対象や方法論、それに伴う概念・用語に関しては言語学者間で合意があるものよりも、合意がないか、この先も合意の見込みがない争点のほうがはるかに多いのが現実である。このような状況を言語学や英語学を志す者はどうとらえるべきであろうか。もとよりこうした状況は昨今はじまったというわけでないし、多種多様な理論やアプローチが並存し、相互に補完しあうことは学問の発展にとってむしろ好ましいことであろうが、現状では理論的対立がかならずしも建設的な議論を生み出しているとは言い難いし、理論がらみの多くの論点を統一するような原理や争点に決着をつける強固な「証拠」が他分野から提供される見込みも、またより包括的な言語理論が生まれる動きも当面はなさそうに見える。本稿ではこのような状況を踏まえて、言語研究における一般的な合意点とともに対立の在りようや争点のいくつかについて学説史的な観点から再考してみたい。

2. 言語学における「合意」

2.1. Hudson (1981) の「合意」 言語学界におけるそうした対立を考えるきっかけとして、Hudson (1981) をとりあげてみた。およそ30年ほど前、Hudson (1981) は、「言語学者が合意できる論点 (Some issues on which linguists can agree)」と題する論考を発表した。この分野ではこうした「総括」の試みはきわめてめずらしいといってよいが、この「論文」で Hudson は、当時の言語学会の状況——言語理論がますます細分化され、「単一の正説 (a single orthodoxy) の支配力が衰えている状況」¹——を踏まえて、それまでの言語学の成果や知見を整理して、見解が分かれて争点となるものを別にして、実質的に言語学者がほぼ合意する可能性の高いと思われる論点 (issues) をいくつかの分野やテーマに分けて整理した陳述のリストを作成してみせたわけである。Hudson が実際に行ったのは、公式に言語学者のパネルを組織して検討するとか、世界中の言語学者にアンケート調査を実施するといったような大規模なプロジェクトではなく、英国のさまざまな分野の50名ほどの言語学者の協力により作成され、概ね容認された言語学上の陳述や知見を編纂しリストのかたちで列挙することであった。ただし、(当然ながら) そのリストにある各々の陳述が言語学者すべてによって認められると主張するものではないと断っている(傍点筆者)。このことは本文の議論でも明らかになるであろう。

83項目からなるこのリストすべてを検討するのは本稿の範囲を超えるので、言語学界の争点を浮き出させるようなものだけをとりあげるが、まずはその作成の背景に触れておくべきであろう。Hudson によると、このリストは、「教育における言語学のための委員会 (the Committee for Linguistics in Education)」から依頼されたもので、学校(教育)への言語学の関連性 (the relevance of linguistics to schools) に関する二回のセミナーのための討論資料として計画されたものであった。そのため、Hudson は学校教育、とくに第一言語(母語)教育になんらかの関連性をもつものを集中して選んだが、その方面に限らず、第二言語教育や言語障害(病理学)

あるいは言語計画 (language planning) などの活動にも関わるとしている。

2.2. 学校教育における言語学をめぐる Web 論争 言語学の知見が国語教育などに有用だとする前提で作られたこの資料が発表されてから十数年後 (1994 年), The LINGUIST List (言語と言語分析に関する情報提供を目的とする専門家が運営するウェブサイト) でこのリストの作成目的である言語教育への言語学の普及とその有用性に関わる興味深い「論争」が行われた。Hudson も最終段階でこの論争に参加している。ことの発端は、米国東部の大学で英語教育を専攻する博士課程の大学院生がカリキュラムにある Linguistics for Secondary English Teachers という (教職課程の) 必修科目が無用だとする意見を述べたことであるが、このやりとりで Oxford University の Chris Li なる投稿者が次のような意見を寄せている。

「なぜ英語 (国語) 教師が授業で使いもしない言語学の抽象的なことばを学ぶ必要があるのか、という問いには (他の人と同様) わたしも答えられない。〈中略〉中等教育レベルでは、深層構造だの、意味関係だの、分節音素や超分節音素といった音の特性のようなことはどうでもよいことだ。言語学は、こう言っては悪いが、少なくとも現時点ではなにかに役に立つようなものではない。もうひとつの懸念は、言語学という学問が非常に流動的な状態にあると思われることだ——つまり、言語学者というのはお互いに相手に同意することがほとんどなく、言語学専攻の大学院生が数年も費やしてある理論を学んでも、それを身につけた途端、その知識が無価値 (invalid) だと宣告されてしまうことだ。かりに教師も学生も比較的無用だと思ふようなものの学習を多数の学生に強要し、数年後に、「すまん、あれは間違いだった、もう一度やってみよう」などというようなことがあるとすれば、その正当化はとても難しいものだ (<http://linguistlist.org/issues/5/5-680.html>)」。

上の議論の後半部分は、明らかに生成文法など合理主義的アプローチを

とる研究プログラムに対する誤解にもとづく批判である。周知のとおり、合理論をとる生成文法では、純粹の帰納法でも演繹法でもない論証(推論)方法であるアブダクション(abduction)を採用する。アブダクションとは、ある不可解な事実や現象 (Peirce のいう「驚くべき観察結果」(Pierce 1902))を説明するために、ある課題や仮説を設定し、それを経験的に検証する論証法である。その仮説が対象の説明に不適當(説明力不足)なら、修正した仮説を構築して検証する、という方法を繰り返しながら、真理により近づくという方法論をとるわけである。このため、自然科学と同様、理論が修正・変更されることはよりよい仮説構築に必要なこととされる。²ただし、そうは言っても、とくに外部の人々や異なる言語観と用法やデータにもとづく帰納的方法論をとる専門家などからも上記のごとき批判が出るのは避けがたく、生成文法に代表される形式言語学への批判の多くも実はこうした類のものである。

いずれにせよ、言語学が流動的だとする Li の議論に対して、Karl Tee-ter (Harvard U, Professor Emeritus) から、言語学(全体)が流動的ということではなく、流動的なのは言語理論であること、言語学は中等教育でも教えるべきだし、言語理論も大学レベルでは有用だ、とやんわりと論す意見が提出された (<http://linguistlist.org/issues/5/5-689.html>)。さらに、University of Bergen の Helge Dyvik なる言語学者も、言語学の知見を伝えることが言語について教えるというよりもむしろ言語理論を教えることだとみなす前提が問題だとした上で、言語に関するわれわれの知識の多くは比較的安定しており、また多くの言語学上の知見は、べつに統率と束縛(government/binding)、ミニマリズム(minimalism)、統一(unification)あるいはラムダ抽象(lambda abstraction)といったことの細部の泥沼にはまることなく伝えられると正論を述べている (<http://linguistlist.org/issues/5/5-690.html>)。³ 当の Chomsky も説明(理論)とはなにか、研究とはどういうことか、などを教えるのに高校で言語学を導入することに好意的な意見を述べたことがある (Chomsky 2004: 79f)。

さて、最終段階で「論争」に参加した Hudson は、自らの 1981 年の論文

の趣旨を紹介しつつ、言語学の知見には争点の多い理論を除けば、合意のあるものも少なくないことを強調するとともに教育現場での言語学の有用性を擁護している。要するに、そこでのやり取りでも合意のない争点の多くは理論がらみの問題であり、それ以外は比較的安定しているという見方をとっているわけであるが、その後の学界の動向に照らして、この見方が言語学界の現状を反映しているか、今一度問うてみるのも無意味ではないであろう。

2.3. 言語学者の「唯一の合意」 ウェブ論争の紹介がやや長くなったが、Hudson がこれを公にした 30 年前と現在では、当然ながら言語学の状況もかなり様変わりしている。Hudson が当時実感していたように、その後の言語学も他の学問分野と同様、蓄積効果やいわゆる “ratchet effect” によって相当の「進展」をとげていることはたしかであるが、理論に関しては未解決の問題が多く、それに伴い分野の多様化と学際化も著しい。しかし、この合意事項が全体として現在も異論の余地が少ないとみられることは、2 年ほど前にアメリカ言語学会の機関紙 *Language* の編集主幹としての任期最後の報告で、Joseph (2008: 688-89) がこのリストを支持していることからわかる。Joseph はこのリスト (“lemmata”) には若干追加したいものや表現を修正すべきものもあるが、異議を唱えるべきものがほとんどないとし、言語学者を結束させるこの概念的・方法論的論点が *Language* の方針と似ており、言語研究に従事する学者が共通に抱いていることすべての（肯定的）確認を表しているものとして一読を薦めている。しかし、Joseph のこうした見解も中立であるべき学術誌の編集長としての言明であることに留意すべきであろう。ここ 20 年ほどは、言語理論でも認知言語学の台頭などによる地殻変動が起り、リストにないものやリストの陳述のいわば裏に隠された論点に関しては、言語学者間の合意形成がむずかしくなっていることも否定できない。肝心の「理論」となると、合意がないのは昔も今も変わらない。

Hudson とほぼ同時期に、かつて生成意味論の論客だった McCawley は、文法家のところに、それぞれが 2 つないし 3 つ以上の立場がとれる興

味深い争点を40個もっていったとすれば、辻褄の合わないものや明らかに間違っているものをとり除いたとしても、少なくとも3千万の文法理論が残るだろうと「算定」したことがある (McCawley 1982, Newmeyer 1998/2000: 7)。これはいかにも McCawley らしい誇張だが、合意がないことについては、生成文法陣営と対立している認知言語学陣営の Fauconnier も10年ほど前に次のように述べている：

「言語学者が合意していることがひとつだけある——すなわち、言語の研究がおそろしくむずかしいということだ (language is diabolically hard to study)。しかし、その方法 (the how's) や理由 (the why's) や目的 (the what for's) については必ずしも合意がない、つまり、言語をどう研究すべきなのか、話し手はやることをいかにしてうまくやり遂げられるのか、なぜわざわざ言語を研究しようとするのか、言語はなんのためにあるのか、また言語学はどうして必要なのか、という点では合意がないのである (Fauconnier 1999: 95)」。

Fauconnier はこれに続けて、上の問いかけへの生成文法の基本理念を要約し、同アプローチが言語の目的や機能、コミュニケーションおよび意味一般の問題を後回しにしたこと、また言語の普遍性を脳に内在するとみる生物学的還元主義をとって、独自の方法論と一般化を追及していることをあげる一方、生成文法の自律的な言語構造観をそれと対照的な認知言語学の言語観とつき合わせている。つまり、言語が一般的な認知能力と分かちがたく結びついていること、言語が意味を構築し伝える役割を果たしていること、言語が認知という氷山の一角にすぎないこと、また言語が言語学者と認知科学者にとって心をのぞく窓であるというお馴染みの主張である (Ibid.: 96f)。認知言語学陣営の主導者のひとりである Langacker は、その10年ほど前に、やはり主流の言語学者の「合意」の問題に触れて、認知言語学がそうした「合意」にくみしない立場であることを鮮明にしている。すなわち、現代の言語理論の多様性にもかかわらず、大方の理論家が真剣

に問いただすことなく受け入れているものとして、(i) 言語がアルゴリズムの特性づけ (algorithmic characterization) に従う自律的体系として、基本的により広範囲の認知的事象とは独立させて研究できる、(ii) 文法（とくに統語論）はレキシコンや意味論から独立した別個の言語構造の側面であり、また (iii) 意味が言語分析の視野に入るとすれば、それは真理条件のもとづくある種の形式論理学によって適切に記述できる、という3点を挙げ、認知文法という言語理論はそうした大方の想定から決別したモデルだと位置づけている (Langacker 1990, Geeraets 2006: 29)。⁴

こうして、生成文法と認知言語学という現在際立っている対立軸がおおよそ30数年前から続いているわけであるが、それ以前からの種々の理論やアプローチも影響力の差はあるものの、依然として併存しているのが現状である。理論と方法論とは当然密接にからみあって、多くの相違や争点が生まれている。以上のことがらを踏まえて、Hudson (1981) のあげた「合意点」からとくに理論にかかわるものとその背後に見え隠れする争点を取り上げて検討してみよう。

3. Hudson (1981) の「定着点 (anchor points)」

3.1. 「定着点」の意義 Hudson (1981) はその導入部で、「研究の一部として考えると、この調査は少なくともひとつの興味深い結果を生み出したように思われる」と述べ、「言語学は実際に、累積効果によって、いくらか進歩していることはまちがいない (linguistics really is making some progress), 気分が落ち込んだときにはそう感じる向きもあるだろうが、ただ単にある「範型」から別のものへと揺れ動いているだけではない」と総括している。また、「さらに、決して網羅的なものを意図したわけではないこのリストにあるもの以外にどういう言明をつけ加えられるかも興味がある、つまりもっと想像力のある言語学者ならそれを数百項目からなるものにすることもできるはず」と述べている。⁵ さらに、Hudson は「言語学者が互いに異を唱えあう際限ないようにみえる能力や平均的言語理論が短命である

ことに学生たちはたぶんやる気をなくすだろう」として、言語学界を皮肉ってみせるが、このリストは「定着点 (anchor points)」として (言語学を志す) 学生を元気づける可能性があるとしている。さらに、多くの言語学者の意見を反映する “a reference work” であるこのリストを編むに際しては、専門用語を避けて門外漢にもわかるように努めたという。

3.2. 「定着点」の要点 以下ではこのリストのうち言語研究の対象と方法論、あるいは言語理論をめぐる争点に関する陳述を順次とりあげて検討するが、それは上で触れたように、Hudson の言明・陳述の妥当性を正面から論ずるためというよりも、むしろ、こうした一般的陳述から除外された、あるいは陰に隠れた争点、つまり大方の言語学者間でこれまでも今後も容易に合意が得られそうもない争点を浮き彫りにし、異論の所以や問題点を今一度確認し整理してみるためである。

Hudson のあげている「定着点」ないし「合意点」は次の3つに大別される。

1. 言語学の研究方法 (the linguistic approach to the study of language)
2. 言語, 社会および個人 (Language, society and the individual)
3. 言語の構造 (the structure of language)

本稿では、これらの合意事項から1を中心にし、理論や方法論および分析・記述に関連する限りで2, 3からもいくつかとりあげたい。

Hudson が上記の1であげているのは次の5項目である。⁶

(1a) 言語学者は言語を経験的に記述する — すなわち、検証可能な陳述を行うように努め、また言語をどうあるべきかではなく、あるがままのかたちでとり扱う。(換言すれば、言語学は記述的であり、規範的なものではない。)

(1b) 言語学者にとって記述の主たる対象は言語の構造であるが、少なからぬ言語学者が構造をその機能 (とくに、意味を伝達するという機能) その他の心理的および文化的体系との関わりにおいて研究している。

(1c) 言語学者は、特定の言語のいくつかの特性がなぜ備わっているのか

を説明するために言語の理論 (theories of language) を構築する。言語学者は相対的に一般理論を重視するか、特定言語の記述を重視するかに関して意見が分かれる。

(1d) (記述および理論) 言語学に不可欠な道具 (an essential tool) は、分析的な範疇と構築物を示すための専門用語を含むメタ言語である。伝統的な、あるいは日常のメタ言語はどれも神聖にして犯すべからざるもの (sacrosanct) ではない。ただし、その多くは先行する言語学の学問の成果であるが、実際には数多くの伝統的な用語もほぼその定着した意味で言語学者によって採用されている。

(1e) 言語学の第一目的は言語一般および個別言語の性質を理解することである。しかし、言語学者の中にはそうした理解が实际的な社会的利益、たとえば、職業として母語教育や第二言語教育にたずさわる人たちや言語障害の治療にたずさわる人のためになるという信念に動機づけられている人もいる。

さて、2 のサブセクションの細目は網羅できないが、その見出しは、

(2.1) 言語 (Language), (2.2) 諸言語 (Languages), (2.3) 言語の変種 (Varieties of languages), (2.4) 変化 (Change), (2.5) 獲得 (Acquisition), (2.6) 言語と方言の関係 (Relations between languages and dialects), (2.7) 行動としてのことば (Speech as behavior) である。また 3 のサブセクションは、(3.1) 発音 (Pronunciation), (3.2) 書記 (Writing), (3.3) 語彙 (Vocabulary), (3.4) 統語論 (Syntax), (3.5) 意味 (Meaning), となっている。

3.3. 「合意」の論点 (1) さて、1 の研究方法に関する 5 項目の陳述はいずれも当たり障りのない言明というべきであるが、まったく問題がないわけではない。とくに、後述するように、(1b) がもっとも問題をはらんでいるようにみえる。

まず、(1a) はどんな言語学の入門書にもみられる一般論であり、(1e) の目的とからみ、一般的には、「言語学は言語の科学的研究である (linguistics is a scientific study of language)」という馴染み深い定義で置き換え

することもできる。後半の「記述的」観点をとる点は当然としても、「言語の科学的研究」の内容をより正確に規定しようとすれば、この定義さえ異論の余地あるものとなる。たとえば、Anderson (2008: 795f) は、最近の論文で、科学的研究という意味が20世紀に相当の変化(拡大)を蒙ったことに触れて、いわゆる「認知革命」にしたがって、言語学の「研究対象が従来の一連の音や語や文あるいはテキストではなく、むしろそういうもの(筆者注＝言語形式)を産出し理解する能力の根底にある知識の体系つまり認知能力であると想定する。すなわち、言語学の探求の中心となる対象は(普遍的意味合いでの)「言語」をささえる認知機能の性質と構造(the nature and structure of the cognitive faculty that supports Language)である」と規定しているが、これはHudsonが(1e)で言及している言語一般の「性質」の内容規定をより認知科学寄りに定義し直したものといえる。⁷ いずれの言明も言語学が経験科学(an empirical science)であることを支持したものと解釈できる。Andersonはもちろん言語使用や社会における言語の役割などの探求を軽んじているわけではないが、あくまで「言語の科学的研究」の中心となる仕事は人の認知構造のある側面を理解することとみているわけである。これは現在ではどのような理論的立場をとるにせよ、「科学的」アプローチをとる以上は認めざるをえない見方であろう。生成文法のように言語学を自然科学と同類のものとみることについては当然議論があるが、言語の科学的研究では検証や反証可能性(falsifiability)が求められること、つまり、経験や観察によって検証したり反駁したりできる学問とみなすことには合意があるとみてよい。ただし、こうした基本理念を受け入れても、すでに触れたとおり、認知機能と言語の関係をどうとらえるのか、あるいは使う方法論や概念装置など、理論と研究プログラムについては合意がない。⁸ むしろ、このあたりの相違点こそが現在の言語学における争点や論議の源だといってよいが、それらの詳細は以下の該当箇所で扱う。

3.4. 「合意」の論点(2)——言語学の対象 次に、問題の(1b)については、研究対象が言語の、とりわけその構造に関するものであることを認

めながらも、言語がもつ機能や心的、社会的かかわりとのからみで多岐にわたる多様なアプローチもあることを認めている点で（現時点でも）実態を反映した「両論併記的」な無難な陳述にみえる。しかし、この場合もどういうアプローチをとるかは、まさに言語（機能）を領域固有的、自律的体系としてみるか、言語活動を多様な認知能力や言語外のものごととの関連とみて、さまざまなレベルの言語分析にとりこむかといった基本的な言語観によって、理論が分かれるとともに、方法論も記述・説明も一般化も変わるのは当然である。つまり、(1b)のような言明は、生成文法と認知言語学（1980年以前にはまだこの名称は定着していない）や機能言語学、社会言語学などの対立と論争を棚上げして、多様なアプローチを認める陳述によってかろうじて合意が得られるとってよいわけである。しかし、「言語形式はそれ自体ではほんのわずかの情報しか伝えないが、主体の脳にすでにあるネットワークをつかまえて、膨大な逐次のおよび並列的な活動を誘発する（Fauconnier 1999: 99）」とみる言語観にもとづき、言語の構造（構文）や形式は一般的認知能力によって動機づけられているとみて、自律的でも領域固有的な体系でもないとする認知言語学では、この項のような「（言語）構造」を主たる記述の対象とする規定にはにわかには「同意」しがたいであろう。

ついでながら、現在の主たる対立軸とってよい生成文法と認知言語学の両陣営が合意しうる言明を付け加えるとすれば、それは「言語は心（認知、人間性）の窓である（language is a window into the mind）」のようなものであろう。認知言語学は、経験論的基盤に立ち、「言語は意味を構築し、伝達するために使用される、またそれは言語学者や認知科学者にとって心の窓（a window into the mind）である」とする「古い伝統を復活させた（Fauconnier 1999: 96）」という。また同陣営の Langacker も「言語が認知の一部であり、言語研究が人の心の理解に貢献すると公言すること——ここまでは形式的、機能的を問わず、多くのアプローチに共通する」と述べている（Langacker 2008: 7）。しかし、「言語が心の窓」といったような表現は、もともと認知革命を主導した生成文法で使われていたものであ

る。近年「現代言語学の諸派では、〈言語〉という用語は一般用法とは異なり、心／脳の内部の構成部分を指して使われる（ときに「内的言語」または「I-言語」と呼ばれる）(Hauser, Chomsky & Fitch 2002: 1570)」といった表現に使われる。⁹つまり、道のりは遠くとも、言語が人間の心あるいは認知の特性を解明する有力な手がかりとみる見方そのものは理論の相違をこえて大方が問題なく「合意」しているとみてよい。

3.5. 「合意」の論点(3) — 理論対立について 記述の対象を扱った(1b)の陳述が(1c)と密接にかかわることは当然であろう。(1c)は言語学の理論の多様性を認めるものだが、言語の特性を説明する一般理論あるいは普遍的に適用できるなんらかの理論を構築する点では同じでも、理論と特定言語の記述のどちらかに比重をおくアプローチが多数であることに配慮した陳述である。実際の研究活動や論議はかならずしもこの2つに分類できるわけではないが、この陳述自体は実態を反映している。主要な言語理論をとっても、合理主義をとる生成文法というまでもなく、経験論的な認知言語学も普遍性と個別性の記述・説明をともに満たす一般化や理論をめざす点では同じである。たとえば、Lakoff (1990) があげている認知言語学の2つの重要な科学的信念 (scientific commitments) とは、(a) 人の言語のあらゆる側面を支配する一般原理を追求すること (the generalization commitment) と、(b) 人の言語の説明が人の認知に関して一般的に知られていることと矛盾しないようにすること (the cognitive commitment), である (Steen & Gibbs 1999: 2)。Hudson のリストが公刊されたあとに影響力を強めるにいたった認知言語学は、生成文法に代わる範型をめざしているようにみえるが、この枠組みの研究方略がもたらした争点は少なくない。その意味で(1c)はあくまで一般論として合意できるものにすぎない。

3.6. 「合意」の論点(4) — 生成文法のメタ言語 最後の(1d)の論点は、言語学分析や記述のための道具たる範疇や構成概念をあらわすメタ言語の必要性であり、この陳述自体は異論をさしはさむ余地はまったくない。しかし、どういうメタ言語、どういう記述・概念装置を設定するのが妥当

か、あるいは必要性があるのか、などについては、まさに理論と方法論そのものの対立が如実にあらわになるところである。

メタ言語に関しては、長年定着している伝統的な文法用語が問題になることはまれで、新しい理論で導入される概念装置や用語が論点となるのは歴史が示すとおりである。とりわけアプローチの変遷が目立つ生成文法の概念や術語への批判がきわだっている。裏を返せば、その研究量と影響力に比例しているとも言える。1990年代以降のミニマリスト・プログラム(MP)では概念装置を大幅に簡素化したか、そこでは「人の言語機能の基本的な事実は離散無限性(discrete infinity)の体系であり、この体系はある既存のものをとりだして、それから新しいものを作る基本的操作にもとづく(Chomsky 2006: 183)」とみる。そこでは、狭義の言語能力と広義の言語能力に分け、狭義の言語能力には、「回(再)帰性(recursion)」という中核的計算機構とインターフェイスへの写像だけが含まれるとみるが、その写像には当然、音韻(論)、形式意味論、レキシコン(語彙の集合)の構造(形態論、語)が関与している(Chomsky, Hauser & Fitch 2002)。

さて、回帰性(再帰性)という中核的計算機構には、結合操作である「併合(Merge)」とそれが満たす諸原理があるとされる(Chomsky, Hauser, and Fitch 2002)。すなわち、離散的な有限個の言語記号を結合し、その操作を無限に繰り返すことによって言語表現の生成を可能にする性質は他の動物にはみられない自然言語特有の特徴とみられる。併合には2種類あり、Xという構造が外部にあるYを併合するのを「外的併合」、X構造が内部のYを併合するのを「内的併合」という。前者は、以前の「句構造規則」の役割を果たし、後者は以前の変換規則の役割を果たす(Chomsky 2004: 154)。こうしたMergeは文の派生上「最小必要条件(a minimal requirement)」としての基本的操作と考えられるが、これすらも「本物の証拠あるいは事実にもとづくなんらの議論」もないまま、「あたかももっともな理由があるかのごとく」、「概念的必要性(conceptual necessity)」があるとして正当化されていると批判する向きがある(Postal 2004: 323f)。¹⁰

3.7. 「合意」の論点(5) — 認知言語学のメタ言語 — メタ言語をめぐる

争点については、言語観や方法論で対極にある認知言語学でも事情は似たようなものである。

認知言語学は「意味の構築とそのダイナミックスに関する真の科学 (a genuine science of meaning construction and its dynamics)」をめざすとする。そのため言語の背後にあって言語を超えてはいるが、いろいろな意味で言語が反映しているもの、言語使用や言語変化や言語の組織化のダイナミックスを支えている認知 (Fauconnier が Goffman にならって “back-stage cognition” と呼ぶもの) の多面的な働きを説明するために、さまざまな認知資源に対応する多種多様な概念装置が使われ、それに伴う一般化も特定の認知領域を超えた強力なものをめざしている。そこで使われる説明原理の主たるものとしては、「参照点 (reference point)」、「ランドマークトラジェクター機構 (landmark-trajector organization)」、「メタファー的写像 (metaphorical mappings)」、「理想化認知モデル (idealized cognitive model)」、「事態把握 (construal)」などがあるのは周知のとおりである。ここでは列举できないが、この他にも認知言語学や認知文法がもちこんだ新しい概念装置や用語はむしろかつての生成文法にも勝るとも劣らぬほど多種多様である。「言語の背後にあって言語が反映している」認知一般にかかわるものを包括的にとりこむ立場としては避けがたいものであろうが、心的実在性 (信憑性) をめざす点からはいささか問題なしとしない。帰納的説明が話者や聞き手が実際にもっているものよりも多くの知識をもちこむことについては批判もある (Newmeyer 1999/2000: 366)。

概念装置については、Fauconnier 自身も当面の言語事象を説明するのに “gimmicks” のようなものを次から次へと繰り出すようなことは当該の言語理論を弱めることになるとしており、上述のような認知の諸相が言語学以外の分野での知見の裏づけがあるとしてその正統性を主張している。つまり、心理学からの「プロトタイプ (prototype)」、「図 — 地の基盤 (figure-ground/profile-base)」、「類推」などや人工知能 (AI) および／または社会学からの「フレーム (frames)」や文化モデル (cultural model)」、また文学や哲学における「メタファー」など、それぞれの分野での知見としてじゅ

うぶんな正当化を受けているとする。さらに、「メトニミー (metonymy)」, 「メンタルスペース (mental spaces)」, 「概念混成 (conceptual blending)」など言語研究に由来する概念も認知一般に適用できることが明らかにされていると主張する (Ibid.: 97)。Fauconnier によれば, こうした方法で得られた成果は, 経済性 (Economy), 操作の統一性 (Operational Uniformity), 認知的一般化 (Cognitive Generalization), という 3 つの注目すべき特性を示すという (Ibid.: 98f)。¹¹

また Langacker も認知文法 (CG, 用法基盤モデル) では高度の概念的な統一性, つまり少数の基本的メカニズムが言語構造のあらゆる領域で作用しており, 伝統的に別々に, 非常に多様な方法で扱われていた現象に統一的な説明を与えるとする「記号的文法観 (symbolic view of grammar)」をとるが, そこで使用される心理的及び言語的存在物 (psychological and linguistic entities) の指定には厳格さを伴うと自認する。また意味を中心と位置づけると同時に, 心的信憑性という点で自然 (natural) だとしている (Langacker 2000: 3, 14f)。とはいえ, 対象が言語である以上, 当然ながらそこで使われる概念や用語は新旧の用語が混在しているし, 生成文法と共通のものもある。たとえば, CG では言語には, 意味 (semantic), 音韻 (phonological), 記号 (symbolic) という 3 つの構造, しかもその 3 つのみが必要だとするが, 記号構造は意味構造 (意味極) と音韻構造 (音韻極) をつなぐ (統合する) 両極 (bipolar) 構造と位置づける。句構造の表示に必要な文法範疇, 線状性, 階層などは CG でもどのみち必要になるが, 文法範疇などでは N, V, NP (Nominal) などが (便宜的にせよ) 使われるし, 語彙項目は固定表現と言い換えられてはいるがどのみち不可欠である。単純な構造から複雑な構造を組み立てる過程は記号組み立て (symbolic assembly) と呼ばれるが, これと Merge の機能上の違いはかならずしも明確ではない。

こうした名称付与は理論的基盤にもとづくが, 実質的に同じ言語事象や記号操作に対して理論固有の用語や表現を使っている感じは否めない。概念指定の厳格化はそれぞれの理論で意識されているが, 認知科学で中核的

な心理学はひとまず別にして、社会学や哲学などの概念は自然科学のような実験による裏づけにあまりなじまず、心的実在性を立証する方法も確立(合意)されているわけでもない。ちなみに、Langacker (2002) は心的実在性はあくまで目標として、実際の議論では「心的信憑性 (psychological plausibility)」という表現を使っている。認知言語学における学際的で多様なメタ言語や説明概念の使用については、内部にあって指導的立場にある池上 (2009: 65) も、(認知) 言語学における鍵概念たる「事態把握 (construal)」をめぐる議論で次のように述べていることは興味深い。

「(前略) 発話に先立つ〈事態把握〉の営みには人間のさまざまな認知能力が関与しうることを見た。この種の記述は認知言語学を扱った書物の多くに見られる通りであるが、記述から受ける印象は、決して見当違いのことが言われているのではないものの、何か思いつくままに説明原理となりそうな項目が雑多に挙げられていて、具体例がそれぞれの具体的なレベルで個別的に説明されているだけという(語用論レベルの議論を想起させる)もののように思える。」

こうしたことも認知言語学や語用論がときに「経験主義的解釈主義」と評される(今井 2009: 83) 理由のひとつかもしれない。一方の生成文法は、今のところ隣接分野からの概念を積極的に援用することは少ないが、理論内部 (theory-internal) の必要性に応じた概念装置が少なくないため、その「概念的必要(必然)性」を強調する必要があるわけである。

しかし、説明に使われる概念装置の心的信憑性や必要性を証明する決め手は容易には得られない以上、多くの言語学の議論で使われる概念やメタ言語、とくに理論や仮説がらみのものに関する合意の見込みは薄い。説明や概念の正当性を裏づけるかにみえる「心的実在性」の解釈にしても、言語運用の認知過程に沿うものをめざす認知言語学と生成文法とではズレがある。Chomsky は、「ある文法的仮説が心的に実在するとは、その問題が心理的かつ真である場合にはじめて言える」ものだとし、「ある領域での真

理 (truth) と区別される心的実在はありえない (Chomsky 1980)」としているのはよく知られている。

理論で必要となる概念やメタ言語をめぐる議論も、結局のところ、それぞれの理論内部の想定と必要性に応じて「原理づけられた」説明力の強いものが生き残るだろうが、人文科学や社会科学の慣行か、言語学界全体で概念・用語の統一や合意に向かう動きはみられない。

4. 研究対象と方法論をめぐる争点

4.1. 研究対象としての「言語」 さて、上ではリストの理論的な部分を一通りみたが、本節では合意点の陰に隠れた争点をやや掘り下げて検討してみよう。このために Hudson (1981) の (1a), (1b), (1e) のほか, (2.1) (Language) の関連項目をとりあげる。その趣旨は言語学が経験科学的企て (an empirical enterprise) であること, またその主たる対象が言語の構造であること, ただし, 構造が機能や他の心理的, 文化的システムと関連していることを認めたものである。さらに, (1e) の前半の「言語学の第一目的は言語一般および個別言語の性質を理解すること」もあわせて考察する。

言語学の対象と目的に関する言語学者の見解には微妙な違いがあることは認知言語学と生成文法の対立軸の要約でも触れたとおりである。その対立軸のついでに確認しておくべきことは, Chomsky にとっては, 言語という概念は文法よりも抽象的な概念であること, また「言語」という概念よりも「文法」という概念のほうが重要かつ根本的なものとみていることである。その理由は, 脳には文法に対応するものが実際に存在しなくてはならないのに対して, 言語に対応するものが現実世界にはないというものである (Chomsky 2004: 131f)。言語学以外の分野では, 別の意味合いで言語という概念そのものに異論を唱える向きもある。たとえば, 哲学者の土屋俊氏は厳しい言語学 (者) 批判で知られるが, たとえば, 「言語」というものを研究対象とすることについて次のように批判している。少し長くなる

が引用してみよう：

「〈……〉 科学的研究はその対象を明らかにすることによって開始されるという主張が述べられているかもしれない。〈中略〉言語学が科学として自立するためには、まさにこの点、すなわち、言語という研究対象がたしかに存在して、それが別個の科学の研究対象であることを明らかにすることが必要である。たとえば、人間の心の現象は心理学によって研究されるが、それとは別個の領域として、あるいは、そのなかでもとりわけその他の人間の心的能力と区別される領域として（心の能力としての）言語能力が区別されなければならない。〈中略〉言語的要素の認知という区分可能な認知現象として確立しなければならないのである。この意味で、近代から現代にかけての言語学の成立とは、言語という対象の存在と区別可能性とを確立することを前提としてはじめて可能になったとしても不思議ではない。

「ちなみに、このような科学観はそれほど説得力のあるものではない。すでに近代の科学は、世界の領域的区分が、たとえばそのようなものが可能であったとしても、異なる方法と記述方式を要求するということに単純なものではないことを明らかにしている。〈中略〉しかし、おそらく、近代言語学の歴史は、この旧来の科学観を前提としてよりよく理解されるものであり、そのことをより端的に述べるならば、現代の主流の言語学が前提とする科学観はたんなる時代遅れなのである（土屋 2008：293f）。」

「時代遅れ」という指摘が正しいかどうかはともかく、言語という研究対象があるとする見解は大方の言語学者の合意が得られているとみてよい。Hudson のリストの第2節（“Language”）の（2.1a）でも、「言語は、その構造に関しても、またその機能ならびに外部との関係に関しても客観的な研究対象となりうる（Language is amenable to objective study）」とある。またこれに関連して、（2.1c）では、「言語は、一部は相互にかかわる

一般的制約群あるいは規則（(a set of interacting constraints, or rules) から成り、また一部は語彙項目の集合たる語彙から成り立つ。（言語学者のなかには言語を文の集合とみて、前言の記述を言語そのものよりも言語の文法に適用するものもいる。）」とある。¹³ 言語が（外部の）認知体系と密接な関わりをもつ（あるいはその一部である）ことはいわずもがなのこととして認めた上で、言語という抽象的概念を客観的に対象として措定することは、理論の違いを超えて大方が異論なしとみていると考えるべきであろう。ただし、すでに触れたとおり、認知言語学のように、領域特定の「言語能力（機能）」の自律性を認めない立場は当然ありうるが、「能力は、あくまで可能性であり、それ自身で存立するといえるような実体的なものではありえない（土屋 2008：294）」というきめつけはいささか乱暴である。¹² ここでは、とりあえず、ソシュールも「言語は実在体でなく、話す主体を離れて存在しない（CLG, 19, n.1）」とみていたこと、また生成文法でも研究対象たる I-言語を文字通り「実体」とみなしているわけではなく、方法論上の实在論的概念的措定にすぎないことを指摘するにとどめておく。¹⁴ 言語学の議論では、むしろその内容規定こそが争点となるべきものである。

4.2. 研究対象としての言語能力と認知機構 言語能力の内容規定とのからみで言語学の目標や対象が依然として論点であることは、アメリカ言語学会の年次大会での会長講演（Anderson 2008）にもとづく Anderson (2008) の論文でもとりあげられている。すなわち、言語学の研究対象が自然言語を獲得し使用するヒトの能力であること、言語理論の目標がその能力の特徴を明示的に記述することであるとしている。Anderson は人間の言語能力がヒトという種に特有のもので、ヒトの生物学の産物であることは疑いないと述べ、その言語機能の特質を特定するにあたり、個々の言語の特性からこの言語機能・能力の性質を推測する主たる方法を2つあげている。ひとつは、「刺激の貧困」からの議論であり、もうひとつはあらゆる自然言語の特徴としての普遍性の探求である。¹⁵

周知のとおり、Anderson は生成文法の進展を担った一人であることか

ら、この基本姿勢は当然であるが、論文では、生成文法と認知・機能言語学双方への配慮がみられる。つまり、ヒトの普遍的な言語能力に関する理論化でしばしばみられる誤った二分法的見方、すなわち、ある特性がヒトの言語の認知的能力、すなわち普遍文法の構造の帰結だとみる立場と、それと反対の立場——人の心の構造のこうした面に外在的な説明を与えること、つまり機能や処理あるいは歴史的変化の作用、あるいは言語体系じたいの外にあるものやその基底にある特殊な認知能力といったものに基盤があるとする観点——とが相互排除的だとみるのは誤りで、こうした2つの説明は両立不可能 (incompatible) ではないと示唆している (ibid.: 795)。この見方は、後述する Newmeyer (1998/2000) の形式言語学と機能言語学の相互関係をめぐる議論を想起させるものである。

Anderson の想定は、上述のように、「認知革命」に従い、言語学の中心の対象は言語能力・機能を支える認知機能だというものである (ibid.: 796)。Anderson によれば、「言語の科学的研究」の中心の仕事は人間の認知機構の諸相を理解することであって、これこそが言語学者をすべて認知科学者にするものとしている (ibid.)。¹⁶ 研究対象を認知能力 (の中心) として、従来より幅広くとらえることは生成文法 (MP) でも基本的に同じである。ここでは「言語機能の理解には実質的な学際的協力が求められる (Hauser, Chomsky & Fitch 2002: 1569f)」として、「現在の言語学の発展が進化生物学、人類学、心理学及び脳科学と結びつくことが有益 (Ibid.)」とされる。生成文法でも MP になってからは当初想定された言語機能の「領域固有性」も「言語に固有でない諸要素のある特別な組み合わせ方 (some special arrangement of elements that are not language-specific) に還元できる」として、より柔軟にとらえる姿勢をとっている (Chomsky 2004: 162f)。

認知とからむ「意味」の問題に関しては、Hudson のリストの3の最後でとりあげられているが、その (3.5b) では、発話の意味の一部が語彙項目と統語関係の意味を反映する文字通りの意味に由来し、一部は使用のコンテキストから派生されることを述べ、また、(3.5c) では言語構造の他の部分にも増して、意味というのは、特別な環境に合わせて用語を規定したり、

既定の意味を変えたりしながら、話者と聞き手の間であれこれと処理されることがある、というものである。現在でもこの意味観は理論を越えて合意があるはずである。

すでに見たとおり、争点は、言語機能 (language faculty) と統語論 (文法) の位置づけと他の認知体系との関係づけである。認知言語学は、「言語と他の心理現象との間に境界を設けることに抵抗することでは突出している。可能な限り、言語構造はそれと不可分の他のより基本的な体系や能力 (たとえば、知覚、記憶、カテゴリー化) に頼っているものとみる (Langacker 2008: 8)」点で言語構造 (文法) の自律性を主張する形式言語学と鋭く対立しているわけである。一方、合理論をとる生成文法は (自律的) 言語機能の外にあって言語にかかわる「他のより基本的な体系や能力」の性質がよくわかっていない段階ではそうした体系 (他の認知能力) を文法に関連づける研究方法をとらないわけである。

5. データと論証をめぐる争点

さて、Hudson のリストでは言語研究における「証拠」に直接言及している部分はない。それは論証の問題がこのリストの趣旨になじまないためであろうが、「合意」が得られにくいものだからとも考えられる。方法論に関して、チョムスキーは自然科学の対象たる自然とは異なるはずの人間の心・脳を扱う場合も (自然科学と) 異なる見方を採用する理由はないとしているが、これには当初から (構造主義でのように) 観察された事実 (発話データ) からの一般化こそが伝統的な「科学」の定義に合致するものとする経験論的見方があるほか、そもそも人間のことばを対象とする言語学が自然科学でありうるかどうかをめぐる論争がある。認知言語学では異なる対象や主題には異なるアプローチが必要であり、人間の心を扱う言語学がたとえば物理学のモデルに従うのはせいぜい危ういだけとする (Langacker 1987: 33)。

言語学でもっともよく使われるデータは文が適格か容認可能かどうか、

あるいはどういう意味だと解釈するかに関する判断であるが、その際に研究者自身や同僚などの直感や「内省」がよく使われてきた。容認性の判断にゆれや段階があることは当初から確認されていたものの、大方の言語学者は、そうしたゆれや容認性の連続性は(plausibility や working memory limitations などの) 言語(文法知識)外の要因や特性によるものとする作業想定をとっていた。しかし、ここ10年ほどで事情は変わってきている。形式的文法の想定や論証方法("armchair linguistics")の妥当性が外部(たとえば、心理学)だけでなく内部からも批判されるようになったこともあり、近年は伝統的な「友人に訊ねる(ask-a-friend)」アプローチに代わる方法としてインターネットを含むコーパスや「実験統語論(Experimental Syntax)」が注目されている(Cowart 1997, Sprouse 2009, Phillips 2009a, 2009b など)。インターネットやコーパスではいわゆる"negative evidence"が使えないという問題はあるものの、補強証拠としてやはり一定の信頼性がある。さらには、実験統語論では、たとえば、大規模な判断の調査や読み取り時間(reading times)や眼球の(動きの)追跡(eye-tracking)や電気生理学やERP/MEG/fMRIなど脳画像(brain imaging)などを利用した「客観性」が追求される。また統語的実験につきまとう問題が解決できれば、リアルタイムでの言語処理の実体の解明と言語計算システムの現実的モデルが開発できる可能性があるともみられている(Phillips 2009b: 148)。言語機能が心/脳(mind-brain)の他のシステムとどういうふうに関わっているかを解明するのに脳科学が魅力的であり、脳画像などが貴重な手段となることはChomskyも認めているが、一方で脳では多様なあれやこれや(all kinds of junk)が起こっていて、その中身はだれにもわからないとも述べている(Chomsky 2002: 160, Chomsky 2004: 182f)。

実験統語論は微妙な判断にもとづく仮説を検証するのにとくに有効だとされるが、それはこの手法で得られるデータが個人の直感にもとづく非公式のデータより安定しているからである(Phillips 2009b)。しかし、多数の非専門家による直感的判断や反応に頼るこうした手法が従来の作業想定 of 破棄につながるかどうかはまだ未解決の経験的問題である(Sprouse

2009)。実際、Phillips (2009a: 55, etc., 2009b: 147) によれば、多くのよく知られた言語学での一般化が覆えるのではないかと一部の見方とは裏腹に、大規模な判断研究は容認性の対照に関してこれまで広くみとめられた知識を確認するものであると報告されている。つまり、従来の直感にもとづくデータの有効性をくつがえす結果が得られることはまれであり、けっして「万能薬」(a panacea) ではないということである。Pinker もかつて同様に、大学生を使った文法性や意味に関する数的評定 (numerical ratings) では判断や評定がいつも一致すると述べている (Pinker 1994: 95)。もう一つの問題は、専門家の直感にもとづく容認可能／不可能の明確な対照が非専門家による多数の標本の結果と食いちがう場合、実験が誤っている可能性もあることである (Phillips 2009a: 55)。実験に関しては、Chomsky も理論的仮説を実験によって実証 (反駁) する可能性について、適切な実験を考案するのが非常に困難だとし、理論と実験は分かちがたく結びついているため、「適切に設計された実験 (properly designed experiments)」とは「理論内 (theory-internal)」と同義だと述べたことがあり、問題の難しさを浮き彫りにしている (Chomsky 2002: 124f)。

「証拠」の基準の厳格化という、近年の顕著な傾向は、Joseph (2008) の回顧でも触れており、(内省による)文法性の判断は、第一次データというより、ひとつの型のデータとして、インターネットを含むコーパスの利用や実験による他のものと共に補強証拠として使われることが多いとしている。¹⁷ いずれにしても、近年、とくに新進の研究者には微妙な事実を厳密に調査するためのより洗練された道具(手段)や方法が求められるようになっている (Phillips 2000a: 49)。さまざまな実験技術には将来性もあるが、陥穽もあり、今後の進歩は統語計算 (syntactic computation) の詳細かつ現実的なモデルの開発いかにかかっているといわれる (Phillips 2009b: 147)。今後この傾向がどう展開するにせよ、実験統語論的手段によりデータの精度と信頼度を高めることが論証の基盤強化につながることは疑いない。

認知機能言語学は用法基盤モデルであり、非還元主義、bottom-up の原

則をとることから、証拠と思われる外的な言語・非言語的データをつみ重ねる方法をとるが、その過程では心理学実験などによる裏づけも当然使われる (Gibbs 2006 など)。

最後に、実証ということでは、上のような個々の統語的事実と実証の問題より根本的な問題がある。それは Anderson (2008: 811) が指摘している点、つまり観察される事実が言語機能のための認知能力から派生したものとみられても、関与しているものがそうした認知能力だけで、他は無関係であることを明確に示す論拠となりうる言語事実がごく少ないということである。このことは言語能力 (機能) の自律性を否定する認知言語学には有利な (「喜ばしい」) 材料ではある。ただし、Anderson が指摘するように、この結論が領域固有の言語機能のような概念にはたいして中身がないとする立場を認めたものとみるのはたしかに早計である。Anderson によれば、「その見方も人の言語獲得及び言語使用能力が他の種にみられぬヒト固有の性質であることを示すようにみえる豊富な証拠と矛盾する (Ibid.: 811)」からである。いずれにせよ、この問題は次節以下で扱う争点と関わる。

6. 言語機能の普遍性と言語獲得をめぐる争点

最後に、Hudson のリストに関連する限りで前節までで浮き彫りになった普遍性と言語獲得の論点に触れておきたい。Hudson がリストで直接普遍性に言及している箇所は (2.1d) だが、(1c), (2.2d), (2.4a), (2.6e, f), (3) も関連する。上述のように、そこで合意されているのは、要するに、「すべての言語には、文法の組織や文の構成の型に関わる共通の特徴 (言語的普遍性) がある」こと、また「規則の複雑さに関する普通の自然言語の間にみられる変異はさほど大きくない」¹⁸ ということである。

6.1. 共通特徴としての普遍性 Hudson が「共通の特徴」と呼ぶものは、語順や統語範疇などのいわゆる「実質的普遍性 (substantive universals)」を指しているものと解されるが、遺伝的特質 (‘the genetic endow-

ment”)としての普遍文法（UG）を措定する生成文法と対照的に、認知言語学では、言語に特有のなんらかの生得的な脳の特性に関する争点については「早計な判断は控え、（中略）むしろより一般的な認知現象の適応のかたち（Langacker 2006: 8）」とみるため、合意はありえない。

「言語能力の抽象的な研究」を推進するものとして措定された UG に関して、Chomsky は、「強固な形式的条件をすべての言語の文法が満たすことを示唆する証拠が 2 種類ある（Chomsky 2006: 99f）」としている。すなわち、(1) 多くの言語に幅広くみられる文法により与えられるもので、多様な言語の生成文法の構築において、その生成システムの形式と組織に関して設定せざるをえない想定としての UG、及びより説得力のある証拠として、(2) 単一の言語の研究から与えられるもので、「刺激の貧困」や多様な生育環境（不十分で不揃いな入力）にも関わらず、ほぼ均質的な生成文法（出力）を産み出すという事実を解決するものとして、同一言語の種々の話者のもつ経験的条件（empirical condition）を満たすような文法を措定する他はない、というものである（Chomsky 2006: 99f）。この「証拠」なるものは、アブダクション (§ 2.2 参照) によって仮説を設定する根拠になっているが、「堅牢な証拠」と言い難いことは、人の言語機能の特徴として「回帰性（recursion）」と言語獲得における「刺激の貧困」を支持する Anderson (2008) も認めている通りである。根拠とされる「刺激の貧困」または「言語獲得の論理的問題」に関しても未だに認知言語学陣営などからの厳しい批判があるのは周知の通りである。

6.2. 言語獲得の生得性をめぐる争点 Hudson のリストで言語獲得をめぐる合意項目は 2.5 節に挙げられた 7 項目だが、そのうち、上の争点にかかわるものがいくつかある。言語獲得（習得）に関する言語学での論点は、すでに触れた言語機能が生得的か、また言語機能が領域一般的か領域特定のなものか、という論点と密接にかかわることは言うまでもない。

Hudson の (2.5a) は、「こどもが話すことを学ぶに際して、そのモデルとなる言語に益々よく似てくる（規則プラス語彙という意味での）言語を習得するが、モデルの発話を直接繰り返すようなことはこどもの話しこと

ばでは副次的な役割しか果たさない」というものである。この陳述じたいには異論がでないであろう。しかし近年の認知言語学での言語習得の研究では、直接的ではないものの、こうした見方に水を差しかねないような知見も提出されている。たとえば、Tomasello は、言語習得における生得的、遺伝的な認知能力は否定しないものの、人の認知の研究では歴史的、個体発生的過程を考慮すべきこと、また言語を含む人に特有の、もっとも重要な認知的技能や産物の（すべてではないにしても）多くを創り出すのはそうした過程だとする。その理由は、その観点から子どもの言語習得が文化的学習技能を使って言語その他の伝達記号を習得すること、また言語記号がとくに子どもの成長にとって重要なのは、ある社会集団の先人たちが個人間のコミュニケーションを行うために、世界を範疇化し、その事態を把握するに際して有用とみなす仕方を具体化しているからだと主張する (Tomasello 1999: 8f)。

子どもが情報豊かな社会環境において人との相互作用を通じて、コミュニケーションの相手の心の理論のようなものを構築していくとみるこうした見方には「刺激の貧困」という発想が入りこむ余地はない (Hudson の合意事項にもない)。認知言語学では言語習得には「膨大な量の実際の学習 (a prodigious amount of actual learning (Langacker 2000: 2))」が必要とみているし、生成文法がとりわけ重視する構造（たとえば、疑問文形成に関する関係詞節をもつ複合名詞句と助動詞の倒置など）に関する入力（データ）の不足についても同様に否定的である。普遍文法抜きでは説明できないという原理や構文の問題は（生成文法の）理論内部の問題にすぎないというのがその立場である (Tomasello 2003: 7, 288f)。

6.3. 「刺激の貧困」と言語獲得 次の (2.5i) も微妙な言明である。ここでは、「言語を習熟するのに関与する知識量は膨大なものである (the amount of knowledge involved in mastering a language is very great), ただしその程度は、そうした知識の多くが無意識的な性質のものであるなど、さまざまな理由で普通の成人の話者からは覆い隠されている。子供は通常、この知識の相当量を学齢期に達する前に獲得する」とある。後半部

分は理論を問わず、大方の合意があるが、問題になるのは前半部分であろう。「膨大な」知識量という表現は「刺激の貧困」とは両立しないかにみえるが、ここでは基本的な文法を獲得する学齢期までの「入力」に限定はしていないし、また「言語（文法）の獲得」という表現を使わず、言語に「熟達する（master）」ことを言っているものと解釈できる。一方、もしこの表現がすでに触れた Langacker (2000: 2) と同じ見方にもとづいているとすれば、これまた合意が得られにくい争点となる。¹⁹ この問題は理論の根幹にかかわるものだけに、ここではこれ以上踏み込まないが、上述のとおり、生成文法が普遍文法を指定せざるをえないとする根拠には決め手となる確固たる証拠がいまだ得られていないことから、「言語獲得の論理的問題」をめぐる論争には決着のつく見通しは当面得られそうにない。

7. おわりに

以上、Hudson (1981) のとりあげた言語学における合意事項とその背後で絶えることのない理論がらみ重要な争点のいくつかをインフォーマルなかたちで考察してきた。その過程では、現在の言語学における研究量や影響力を勘案して、便宜的に対立軸を生成文法と認知言語学に設定してみたが、言うまでもなく、対立はこのふたつにとどまるものではなく、それぞれの陣営でも根幹にかかわる問題を含めてさまざまな相違や対立がみられるし、また言語学における争点はそうした内部論争にとどまるものでもない。すでに触れたとおり、主たる争点が集中する言語理論では、30 年前と比べて言語学の研究は質量ともに飛躍的に増大し、深化していることは疑いないが、上で見たように、それに見合って理論間の争点が解消されるのか、合意点が増えているきざしはない。言語とは何か、言語学の対象や目的はなにか、など根本的な争点がいまだ数多く残り、解決の見通しが立たないこうした言語学の現況をどうみるべきか、またこれらの争点を包括的に統合しうる理論がありうるのか、といった問いに答えるのは当然ながらきわめて難しいことは当初の予想通りである。かりに「包括的な言語理論

(a comprehensive theory of language)」のようなものが可能だとしても、そうしたものを構築する具体的方略や内容がこれまで示されたことはない。²⁰ そうした試みにいくらか近いものとして、Newmeyer (1998/2000) があるが、これは生成文法に代表される形式言語学 (formal linguistics) と認知言語学を含む機能言語学 (functional linguistics) の根本的な相違をかなり包括的にとりあげて評価するとともに、対立を具体的にあぶりだして、生成文法寄りの立場から、両者が補完しうる言語事象を論じたものとして貴重である。

Newmeyer がとりあげた争点は、統語論の範囲、内的(文法理論内の仮説や条件などによる)説明と外的(言語運用がらみの言語外の認知機能などによる)説明、統語範疇の自律性(不連続性)と境界の連続性の問題、文法化(Grammaticalization)及び通時的観点、言語類型論などの役割などである。細部に踏み込む余裕はないが、Newmeyer は基本的に生成文法擁護の立場から、文法の自律性を認めながらも、統語論が(言語運用などの)外部要因の影響から完全に免除されているわけではなく、両者の説明が矛盾しない例や外部要因(圧力)が文法に標識を残している例を論じている。ただし、彼は生成文法批判に使われる多くの論点が理論の根幹をゆるがすものではないとする。また認知体系としての文法の自律性に対する(機能言語学陣営からの)批判が「生得性 (innateness)」という本来別個の問題とからめて論じられがちであることを指摘している。前節で触れたように、「生得性」は生成文法でもその正しさが証明されるよりも単に想定されることのほうがはるかに多いことは認めながらも、この想定は実際の文法分析とは無関係であり、また文法障害が遺伝する事実などからも文法が自律的認知体系であることには信憑性があるとする (Newmeyer 1998/2000: 89f, 366)。ついでながら、文法障害の遺伝はPinkerも生得説の根拠としているものである (Pinker 1994, etc.)。さらに、認知言語学における「文法化」の説明に(当然)通時的観点を持ち込むことについても、世代を横断する通時的なものが幼児あるいは成人の(認知)能力に組み込まれていないことも反証として挙げている (Ibid.: 238)。

しかし、生成文法擁護派である Newmeyer も機能が形式に及ぼす影響に関する数多くの重要な一般化によって、機能主義が言語学の地平線を豊かにしたことは率直に認めている (Ibid.: 369)。統語論の自律性を示す論拠を多数挙げる一方で、彼はリアルタイムの構文解析の圧力 (parsing pressure) と構造 — 概念の類縁性の圧力 (iconicity pressure) に関しては、外的要因を考慮に入れた機能主義的説明に分があるとして、文法の自律性と外部からの動機づけが両立しうること、つまり文法の一部がそうした外部からの力によって形成される可能性があるとしている (Ibid.: 366f)。こうして、構造と機能（動機づけ）の相互関係に関する彼のとらえ方は折衷的なものである。すなわち、(古典的)機能主義では構造と動機づけの中間に自律的（統語）体系を介在させない、直接的、多角的関係とみるのに対して、Newmeyer の想定する両立型モデルは、自律的（統語）体系を構造と動機づけの間に介在させるものである (Ibid.: 162f)。

形態と機能、つまり統語現象と外部の運用システム（談話情報など）の関係については、Chomsky ももともと外的説明の可能性を頭から否定していたわけではなく、すでに触れたとおり、1990 年代以降の MP では狭義の言語能力 (FLN) の特性の一部が外部運用システムからの要請の結果だととみとめる柔軟な立場をとってきている。これに関連する生成文法での試みのひとつとしては、Reinhart (2006) の「インターフェイス方略 (interface strategies)」の提案がある。そこでは、FLN と広義の言語能力 (FLB) との有機的関係を示すものとして、数量詞の繰上げ現象や主強勢移動現象などを論じている。しかし、その Reinhart も、「インターフェイスを正確に把握することがいかなる統語理論にとっても適切性の基準となるが、これを言語の機能的説明と混同してはならない。(FLN での) 計算システムの特性が言語使用の機能的理由から派生させることがまったく不可能なことは、これまで十分な証拠がある (Ibid.: 2)」として、生成文法と（認知）機能文法との補完しうる領域がごく限定的であることを明確にしている。たとえ Newmeyer の両立型モデルを容認するにしても、これが形式言語学陣営の大方の基本姿勢とみられる。

すでに触れたように、Anderson (2008: 811) も、ある種の(言語)特性を人の普遍文法のような言語能力に起因するとみる考え方とそうした特性が外部の機能や言語処理や歴史的変化などによるとみる考え方がけっして相互排他的でないと言い、言語能力とその構造に関する多くの重要な事柄の基盤が(双方で)重複している可能性も視野に入れて、普遍的な言語認知能力に関する実質的な理論を構築する方法を見出すべきだと主張している(Ibid.: 795)。しかし、Anderson は同時に、認知能力の性質に関する上の問いに対する真の答えを見いだすために他の種にみられぬ自然言語の特性を検討する際、現在手にできる道具(tools)は適切でないかもしれないとも述べている。もしこの問題提起が正しければ、(認知と心の性質及び脳との関係をより広く探求するという点から、)これまでより適切な研究手段や概念装置を探求する方向に向かって対立する陣営が歩み寄る可能性がないわけではないし、ゆくゆくはそれらを超克するような包括的理論や説明も可能になるかもしれない。

最後に、Hudson の調査研究の動機になった学校教育における言語学の位置という点に触れておくべきであろう。言語学の教育が学校教育に役立つか否かという問いについては、冒頭で紹介した Teeter の無難な見解を支持すべきであろう。すなわち、流動的なのは主として言語理論がらみの問題であることを明確にしたうえで、言語学の確立した、合意のある知見のうち、言語教育に有益な部分は、説明法、方法論ともども中等教育でも積極的に教えるべきである。一方、大学レベルでは、上でとりあげた争点が争点でなくなるまでは、特定の言語理論に偏ることなく、主要な言語理論や説明を紹介、説明するに当たっては、主たる争点にも触れて、現在の段階では理論やその派生的論点の多くがあくまで「仮説」であること、しかも自然科学とは異なり、「検証」に際しても堅固な証拠を得ることが容易でないことを明らかにして、できるだけ客観的な視点で取り扱うべきであろう。²¹

註

- ¹ ここで Hudson が “a single orthodoxy” と呼ぶものは 20 世紀前半における (Saussure に発する) ヨーロッパ型の構造主義や米国型の構造主義言語学、さらに 1960 年代以降の生成文法理論のような、ある時代に支配的だった言語理論を漠然とさしているものと解される。
- ² <http://carbon.ucdenver.edu/~mryder/mem19.html> を参照。Pierce は帰納法、演繹法、アブダクションを科学方法論の 3 つの相 (phase) とみなしていた。すなわち、科学的方法是、まず実際の事象に関する推測や仮説であるアブダクションにはじまり、ついで、その仮説が正しいと想定されれば、そうでなくてはならない他のことがらに関する仮説から演繹的推論によりいくつか結論が導かれる。上での「その他のもの」というのは実験的に検証されることが望ましいとされる。最後に、仮説の検証はその仮説から演繹的に得られたものを実験によってたしかめようとするものである。この仮説検証の過程全体 (単に標本から母集団への論証の一部でないもの) を Pierce はのちに帰納法と呼んだ (*Stanford Encyclopedia of Philosophy* (2001), s.v. Charles Pierce を参照)。
- ³ 生成文法における統率と束縛の理論は「原理とパラメータ (P&P) のアプローチ」としてまとめられた 1980 年代から 1990 年代初期までのモデル (理論) で、90 年代以降現在にいたるまではミニマリスト・プログラム (MP) —— 言語機能が経済性と最適性を満たす設計であることを示そうとする研究プログラムに移行していることは周知のとおりである (本稿の本文や他の注記も参照)。

またラムダ抽象 ($\lambda t.x$ の関数で表わされ、 t は項、 x は変数) とは、プログラミング言語の理論で使われるが、モデル理論の意味論であるモンタギュー意味論において高次述語論理とともに基づくラムダ計算の一部で、言語構造の意味の記述を単純化、統合するための論理式としても使われる。Unification (統一) にもとづく自然言語の意味解釈理論は、Robert Moore (1989) (Moore, R. 1989. Unification-based semantic interpretation. *ACL* 1989: 33-41.) らが lambda calculus に代わるものとして提唱したもの。

- ⁴ 本稿で「認知言語学 (Cognitive Linguistics)」と総称する言語研究のアプローチは、現時点でも単一の理論、つまり単一の統一的な理論教義があるわけではなく、むしろ多様で柔軟な研究の枠組みと解すべきである (Geeraerts 2006: 2f, Langacker 2008: 7 など参照)。とはいえ、統一的な理論でなくとも、「認

知的」アプローチの思想基盤と広義の方法論などには大まかな親和性があるとされる (Langacker 2008: 7)。概略的には、言語は意味 (伝達) にかかわることがすべてだとみる立場をとること、つまり「言語は情報を組み立て、処理し、伝達する道具 (Geeraerts 2006: 3.)」とみることである。生成文法も言語を「認知的」しくみとみる点は同じだが、認知言語学の「認知」は、「言語が心的実在性をもつ現象であること (言語学が認知科学の一部だということ) ばかりでなく、情報の処理と記憶 (保管) が言語のきわめて重要な “design feature” であること示す (Ibid.: 3)」とみる点で生成文法と鋭く対立している。要するに、この立場は「意味に関することがすべてとして、(1) ことばの意味は観点 (視点) に依存する、(2) ことばの意味はダイナミックで柔軟である、(3) ことばの意味は百科全書的で自律的でない、(4) ことばの意味は用法と経験にもとづくものである、という基本的想定にたつ (Geeraerts 2006)。

Langacker の「認知文法」は広い意味での認知言語学に属するが、認知言語学も機能的言語学の伝統の一部と位置づけられる (Langacker 2008: 7f)。このモデルの想定は、言語 (文法) は自律的 (autonomous) でなく、(特別な「言語機能」を指定する、しないにかかわらず) 認知処理 (cognitive processing) との関わりで記述することが必至、というものである。より具体的には、文法構造を自律的な形式体系や表示レベルとはみず、レキシコン、形態論及び統語論は連続した記号体系であり、別々の部門に分けるのは恣意的である、というものである (Ibid.: 29)。認知言語学の文法は、言語使用によって形成、維持、修正される、たえず進化する一連の認知的ルーティン (定着ないし習慣化) として動的にとらえられる。そこでは「言語の文法は、確立した言語習慣の話者の理解力の在り処としての認知組織の諸相である、と規定され、その特徴は、慣例的な言語単位の構造化された目録である (Langacker 1987: 57)」。ついであるが、認知文法の具体的アプローチは、生成文法と対照的に、「マクシマリスト的」、「非還元主義的」、「ボトムアップ的」性質を謳っている。なお、詳細については、Langacker (1987, 2000, 2008) などを参照。

認知言語学が単一の統一理論でないのと同様に、1990年代以降の生成文法も Minimalist Program (MP) と呼ばれるように、厳密には「理論」でなく、「研究プログラム」である (Chomsky 1995, Chomsky, Hauser & Fitch 2002, etc. 参照)。MP の初期から現在まで基本理念は同じでも細部の修正が行われているのは自然科学的方法論をとる理論としては当然のことである。

⁵ Hudson のこの論文は、英国の Subject Centre for Languages, Linguistics

and Area Studies のウェブサイト (<http://www.llas.ac.uk/resources/gpg/135>) で公開されているが、そこでは「2002 年の時点で、改訂中 (currently being revised)」とある。しかし、現時点では、改訂された形跡はない (Joseph 2008: 688 も参照)。この理由については、憶測にすぎないが、Word Grammar など他の仕事で多忙のためか、これ以上手を加える余地がないと判断したか、あるいはその後の言語学界の状況 (1970 年代中期以降、認知言語学をはじめ多様な理論やアプローチが世に出ている) に照らして、これ以上合意項目を追加するのが著しく困難になったと判断した、などが考えられる。Hudson 自身も社会言語学やとくに自らの創始した Word Grammar を推進している (Word Grammar については、<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/dick/wg.htm> などを参照)。

- 6 83 項目には通し番号がなく、1～3 の各セクションおよびそのサブセクションの下ではそれぞれアルファベットでリストが示されている。オリジナルの (サブ) セクション番号とそのなかでの項目 (アルファベット表示) との整合性のために、本稿では便宜的にセクション番号とアルファベットの組み合わせで表示する。
- 7 Anderson の論文は、2008 年 1 月シカゴでのアメリカ言語学会の年次大会での会長講演にもとづくものであり、また近刊予定の著書の一部ということであるが、現時点 (2010 年 1 月) では公刊されていない。なお、引用中の大文字の “Language” は脳内の言語能力をさす表記として使われる。
- 8 近年は経験論 (「経験論的解釈主義」ともいわれる) に立脚する認知言語学と合理論の生成文法との対立が際立っているが、ここでは経験論と合理論の論争そのものについては深入りしない。いうまでもなく、この対立が争点となるのは同一分野でのアプローチについてであって、分野が異なれば、いずれが妥当かを含めて優劣を論ずることは意味をもたないものになる (これについては、*Stanford Encyclopedia of Philosophy*, s.v. empiricism vs. rationalism (<http://plato.stanford.edu/entries/rationalism-empiricism/>) などを参照。)
- 9 次の Chomsky の説明も参照されたい: “I am primarily intrigued by the possibility of learning something, from the study of language, that will bring to light inherent properties of the human mind... Speaking again from a personal point of view, to me the most interesting aspects of contemporary work in grammar are the attempts to formulate principles of organization of language which, it is proposed, are universal reflections

of properties of mind.... (Chomsky 2006: 90).” また、意味論と語用論のトピックを幅広く扱った Pinker (2007) の副題は、*Language as a window into human nature* となっている。

- ¹⁰ ミニマリスト・プログラム (MP) の枠組みでは、言語は外的認知機構との接点である2つのインターフェイス (知覚・運動にかかわるものと概念・意図にかかわるもの) の諸条件に対する (ある妥当な意味での) 最適の解だと想定して (Chomsky 2004: 163, etc.), 言語能力は最小の道具立てから成りたつものとみる。従来のアプローチにみられた余剰性を排除する理論構築をめざす。言語機能の標準的想定 (standard assumption) では、回帰/再帰システム (recursion) を中核とする計算システムからなる狭義の言語能力 (Faculty of language—narrow sense, FLN) の機能は、計算システムの入力となる語彙項目をレキシコン (語彙の集合) から (その固有の特性とともに) 選択・指定し、計算システムによって句や文を組み立てる派生と構造記述をつくりだすこと、とみることである。狭義の「文法」である FLN はより広い意味の言語能力 (Faculty of language—broad sense, FLB) に埋め込まれていると想定される。この FLB は意味概念にかかわる「概念・意図体系 (conceptual-intentional (CI) system)」, 音声 (音韻生成と知覚) にかかわる「知覚・運動体系 (sensory-motor (SM) system)」及びその他の体系を含むものとされている (Hauser, Chomsky & Fitch 2002: 1570 参照)。FLN はそれぞれ CI システムと SM システムと接すると想定されているが、各接点はそれぞれ CI インターフェイス及び SM インターフェイスと呼ばれる。MP はこの FLN の特性を明らかにすることと、またその特性が外側の CI 及び SM のシステムとどう関わるかを扱う。認知のいかなる面も原則として言語にアクセスできると思われるため、言語使用に際しては神経体系の多くの構成部門が動員されると考える (Ibid.: 1570)。

さて、上のような想定のもとで、FLN での派生の過程では計算システムがレキシコンにアクセスし、語彙項目をレキシコンからとりこむ。また派生では要素が Merge という操作によって結合されてより大きな構造が形成されると想定するが、Postal は、上の議論は question-begging な想定にもとづく “junk linguistic character” をもつものときめつけている (Postal 2004: 323ff, etc.). Postal の過激な批判はともかく、半世紀近くわたる生成文法の発展過程では、いくつかのアプローチやモデルの改廃や概念・メタ言語の消長が繰り返されてきたのは周知のとおりである。1980 年代の「原理とパラメータ (P&P)」の枠組みに至って、UG の「全体構成の枠組 (the format framework)

を全面的に排除するとともに、生成文法にとりこまれていた伝統的な規則や構文の概念の排除にも乗りだした（Chomsky 2006: 182）」ことで、メタ言語がかなり削減されたことはたしかである。ただし、現在も生成文法陣営内で種々の不一致があることは言うまでもないし、同理論から出ながらも異なる「文法理論」が並存しているのも事実である。たとえば、上で触れた語と文法（概略的には統語規則）の関係に関しては、主辞駆動句構造文法（HPSG）、語彙機能文法（LFG）、並列文法（Parallel grammar）などでは、主流派のMPと異なり、語と文法を区別しない（できない）としており、その点に関する限り、認知言語学内の認知文法や構文文法（Construction grammar）と共通している。その認知言語学陣営も、すでに述べたように、基本的理念を共有しつつも多様なアプローチからなる混成理論である（Geeraerts 2006: 3）。

- ¹¹ ここでの経済性とは、生成文法のそれとはまったく異なる意味で使われていることに注意。つまり、舞台裏の認知を詳細に説明しようとする、場面文脈における言語形式が膨大な認知的構築物（類推による写像、メンタルスペースの結びつき、参照点の組織化など）を誘発すること、言い換えれば、言語形式の短さとそれが引き起こす豊かな意味の構築の対照が著しい、という意味である。また操作上の統一性とは、従来のような言語分析での多様なレベルにまたがるさまざまな操作（文レベルでは統語論、意味レベルでは意味論の構成主義的扱い、推意、間接発話行為、派生的意味などは語用論、メタファーやメトニミーは修辞学にかかわる装置）が適用されると考えられていたが、認知言語学では、言語活動を背後からささえる認知はいろいろな意味でそうしたレベルすべてで統一的に働くとみる。たとえば、figure/ground（ゲシュタルト心理学における図と地）と視点の機構は文に浸透し、メタファーはもっとも基本的なレベルからもっとも洗練された創造的なレベルにいたるまで意味を構築し、フレーム、スキーマ、プロトタイプなどは認知文法や構文文法における語レベルおよび文レベルの統語的、意味的特性を説明する、といったことをさす（言語はその背後の認知活動をあらわに示すことがなく、そうした認知の働きが意識されないため、こうしたしくみを理解するのがむずかしいとする）。さらに、認知的一般化とは、操作上の統一性が本質的に言語と推論にかかわるのに対して、（場面文脈も含む）さまざまな言語のレベルを横断して、さらに幅広いより興味深い（認知的）一般化があるとする見方をいう。結果として、言語学はもはや諸言語の内部の特性の自己充足的説明ではなく、人の認知の一般的諸相を説明する強力な手段だとみる（Fauconnier 1999: 96f）。なお、類推やメタファーなどに関する認知言語学の位置づけと異

なる批判的見方については、Pinker (2007: 251ff) を参照。

- ¹² Joseph (2008: 689, n.12) は、Hudson (1981) の合意リストのうち、(2.1c) の陳述中の「規則」という表現は修正したいと言い、その理由として、「文法規則は、素朴な規則の概念が含意するほど包括的ではなく、もっと特殊な局所的なものとする。したがって、規則の性質は言語学者間では合意点というより相違点になる可能性があるからだ」と説明している。
- ¹³ こうした見方に対する反論については、栗原 (2006: 9f) も参照されたい。
- ¹⁴ 土屋 (2008: 3) では、執筆年代に大きな隔たりのある論考が収録されている関係で、問題の「批判の対象となっている言語学の理論と実践が1980年代から1990年代にかけて執筆されたものが中心となっているとして、生成文法もせいぜい「統率と束縛の理論 (GB 理論)」まで、コーパス言語学はまだ旧態然たる単語を数えるだけの研究方法、認知言語学についてはまだ明確な姿を現していない時代のものである」と断っているが、本稿でとりあげている箇所は2005年執筆のものであるから、これは公平な弁明とはいえない。ついであるが、当然とはいえ、土屋も「人間であるならばすべての人が……言語能力を有していると想定している。これを言語の種的普遍性と呼ぶことにしよう〈中略〉言語研究の課題としてこの能力の解明があげられるのは不思議ではない (土屋 2008: 379)」と述べており、人の言語能力が普遍的であり、研究対象となりうることにたいして否定しているわけではないようである。
- ¹⁵ 「刺激の貧困 (the poverty of the stimulus)」という表現は、認知言語学陣営が生成文法批判に際して使っているが、Chomsky (2006: 182) は、この表現が misleading だとしていることもあり、近年はより特定化した「言語獲得の論理的問題」または「プラトンの問題」ということが多い。生成文法が言語習得の仕組みを説明する前提とするこの妥当性に関しては、それは「(生成)理論内部の問題」であり、言語獲得には膨大な時間と十分なインプットがあるとしてこの根拠を認めない認知言語学の陣営と対立しているのは周知のとおりである (Tomasello 2003: 7, 288f ほか)。なお、本文のセクション6の議論を参照。
- ¹⁶ ただし、Anderson はこの陳述に異議を唱える向きも少なくないことに驚くとして、これさえも争点になりうることは認めている。
- ¹⁷ すでに触れた Joseph (2008) は、*Language* の編集主幹としての7年間を回顧し、もっとも広い意味での言語学という分野にみられる最近7年間の動向として、概略、以下の (i) ~ (iv) をあげているが、その最初のものが「証拠」に関するものである。

(i) 言語学は、データと事実と記述に関わる、常に経験的企て(an empirical enterprise)だったが、作業に用いる証拠(evidence)の性質に関する基準が前より厳しくなっている(the bar has been raised)ように思われる。つまり、研究論文は以前よりもはるかに実験にもとづくようになっている。ここで「実験的」というのは、なんらかの統制された調査研究に関わるという意味である。また、研究が以前よりコーパスにもとづくものとなっていること、つまり多くの研究が(単に確証のためでなく)一次データ(primary data)として、インターネットを含む種々のコーパスを使うようになっている。

(ii) 言語学はこれまでも常に数字を使う数学的側面をもっていたが、数量的方法の使用とそれに関連して定式化とモデル化(modeling)がかなり増えているようにみえる。関連のデータの統計的分析に関する報告や考察対象となる問題のあるモデルを提供しないような論文はまれである。

(iii) 言語学者に直接関連する論文は言語学者からだけでなく、心理学者や人類学者など、長年、ヒトの言語の性質を理解するという総合的目標に貢献することがわかっている関連分野からも出されている。このことはこの機関誌の初期からみられるものである。

(iv) 言語学の論文は共同研究チームの手になることが増えている。*Language* に掲載される論文の平均著者数は毎年増えており、2007年には9名連名の論文も掲載された。この動向は言語学を人文科学よりもいくらか社会科学に連なるものになっているが、その結びつきは強固なものではない。

¹⁸ ここでの通常の間言言語(normal human languages)とは、エスペラント語やコンピュータ言語のような人工言語やピジン語のような特殊なものを除く一般の自然言語を指す。

¹⁹ ついでながら、Hudson は生成文法、とくに自律的統語論にきわめて批判的である一方、認知文法は支持している(Langacker 2008: 5)。

²⁰ ちなみに、土屋(2008: 1, etc.)は、J.L. Austin が21世紀の来るべき言語学を語るのに使った「真の包括的な言語の科学」という表現を表題にしているが、そこでも具体的にいかなる手順でそうした言語科学が可能になるかを示しているわけではない。

²¹ 本稿のテーマからは、応用言語学の問題にも触れるべきであろうが、言語獲得以外の問題は本稿での論点と直接関わらないので扱わなかった。

参考文献 (References)

- Anderson, S. 2008. The Logical structure of linguistic theory. *Language* 84-4, 795-814.
- Barlow, M. and Kemmer, S. (eds.) 2000. *Usage-based Model of Language*. Stanford: CSLI Publications.
- Chomsky, N. 1980. *Rules and Representations*. Oxford: Basil Blackwell.
- _____. 1995. *Minimalist Program*. Cambridge: The MIT Press.
- _____. 2002. *On Nature and Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- _____. 2004. *The Generative Enterprise Revisited: Discussions with R. Huybregts, H. van Riemsdijk, N. Fukui and M. Zushi*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- _____. 2006. *Language and Mind*. 3rd edition. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Chomsky, N., Hauser, M.D., & Fitch, W.T. 2002. Appendix ("The Minimalist Program") to Hauser, Chomsky & Fitch (2002).
- Cowart, W. 1997. *Experimental Syntax: Applying objective methods to sentence judgments*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Fauconnier, G. 1999. Methods and generalizations. In Janssen & Redeker (1999).
- Geeraerts, D. 2006. Introduction: A rough guide to Cognitive Linguistics. D. Geeraerts (ed.) 2006, 1-28.
- _____. (ed.) 2006. *Cognitive Linguistics: Basic Readings*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Gibbs, R., Jr. 2006. *Embodiment and Cognitive Science*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Gibbs, R. & Steen, G. (eds.) 1999. *Metaphor in Cognitive Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.
- Hauser, M.D, Chomsky, N. & Fitch, W.T. 2002. The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve? *Science* Vol.298, No.5598 (Nov. 2002), 1569-1579.
- Hudson, R. 1981. Some issues on which linguists can agree. *Journal of Linguistics* 17, 333-343. Also available online at <http://www.llas.ac.uk/>

- resources/gpg/135.
- 池上嘉彦. 2009. 認知言語学における〈事態把握〉. 『月刊言語』Vol.38, No.10, 62-70.
- 今井邦彦. (編著) 2009. 経験科学はどこへ? 『月刊言語』Vol.38, No.1, 82-3.
- Iwasaki, S., Hoji, H., Clancy, P., and Sohn, S-O. (eds.) 2009. *Japanese/Korean Linguistics*. Vol.17.
- Janssen, T. & Redeker (eds.). 1999. *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope, and Methodology* (Cognitive Linguistics Research, 15) The Hague: Mouton de Gruyter.
- Joseph, B. 2008. The Editor's Department: Last scene of all... *Language* 84: 4: 686-690.
- 栗原豪彦. 2006. 言語学の対象をめぐる二分法再考. 『北海学園大学人文論集』第35号, 1-39.
- Lakoff, G. 1990. The Invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics* 1, 39-74.
- Langacker, R. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- _____. 2000a. Introduction to *Concepts, Image, Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter. Also in Geeraerts (2006), 29-67.
- _____. 2000b. A dynamic usage-based model. Barlow & Kemmer, 2000, 1-63.
- _____. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- McCawley, J. 1982. *Thirty Million Theories of Grammar*. Chicago: University of Chicago Press.
- Newmeyer, F. 1998/2000. *Language Form and Language Function*. Cambridge: The MIT Press.
- Phillips, C. 2009a. Should we impeach armchair linguists? Iwasaki, et al. (eds.) *Japanese and Korean Linguistics* 17, 49-64.
- _____. 2009b. Real-time syntactic computation. Paper read at the 27th Conference of the English Linguistic Society of Japan. Nov.15, 2009. Osaka Univ. (*Conference Handbook* 27, 147-8).

- Pierce, C. 1902. Memoir 19. Draft E: *On Arguments*.
<http://carbon.ucdenver.edu/~mryder/mem19.html>
- Pinker, S. 1994. On language: Interview. *Journal of Cognitive Neuroscience* 6-1, 92-97.
- _____. 2007. *The Stuff of Thought: Language as a Window into Human Nature*. NYC: Penguin.
- Postal, P. 2004. *Skeptical Linguistic Essays*. Oxford: Oxford U.P.
- Reinhart, T. 2006. *Interface Strategies*. Cambridge: The MIT Press.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de Linguistique Générale*. Paris: Payot.
- Sprouse, J. 2009a. Experimental syntax: What does it get you?
http://crl.ucsd.edu/cuny2007/program/186_Abstract.pdf
- _____. 2009b. Continuous acceptability, categorical grammaticality, and experimental syntax. *Biolinguistics* 1: 118-129, 2007 Also available: http://www.ling.cogsci.uci.edu/~jsprouse/papers/7_Sprouse.pdf
- Steen, G. & Gibbs, R. (Eds.) 1999. Introduction to Gibbs & Steen (1999), 1-8.
- Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- _____. 2003. *Constructing a Language: Usage-based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 土屋俊. 2008. 『真の包括的な言語の科学』 東京：くろしお出版.